

**余暇活動と消費としての日本語学習**  
—カナダ・フランス・ポーランド・香港における事例をもとに—

**Learning Japanese as leisure and consumption:**  
Cases from Canada, France, Poland, and Hong Kong

久保田竜子（ブリティッシュコロンビア大学）

瀬尾匡輝（香港理工大学）

鬼頭夕佳（フランス国立理工科大学）

佐野香織（ワルシャワ大学<sup>1</sup>）

山口悠希子（香港大学専業進修学院・香港城市大学専上学院）

米本和弘（マギル大学・ブリティッシュコロンビア大学）

## 要旨

本パネルでは、カナダ、フランス、ポーランド、香港の日本語学習者へインタビュー調査を実施し、Kubota（2011a）が明らかにした「余暇活動と消費としての外国語学習」の観点から結果を考察する。そして、海外における日本語教育の新たな方向性を模索し、参加者とともに海外の日本語教育の在り方について再考する。

**キーワード:** 海外の日本語教育; 余暇活動と消費; 趣味; 投資; 多様性

## 1. 理論的枠組み：余暇活動と消費としての外国語学習（久保田竜子）

第二言語または外国語習得の研究の中で、学習への動機の有無は、個人の心理的領域の問題であるとされ、学習動機の分類や計量に焦点をおいた研究が長年なされてきた

（Dörnyei, 2001 参照）。それに対して、Norton（2000）は学習者と学習者を取り巻く社会（家庭、職場、教室、地域社会など）との相互関係に注目し、学習に対する意識は、学習者が社会との接触を通して複雑に構築していくアイデンティティに深くかかわっていると提唱した。さらにNorton（2000）は、移民が社会・経済参加を望んで現地語を学ぶことは、従来心理学的見地から提唱されて来た道具的動機づけと考えるより、文化資本（社会の中で正統とされる教養、知識、技能、学歴など）を獲得蓄積するための投資

（investment）である（Bourdieu & Passeron, 1977）と提唱した。学習者の言語学習への投資は自己のアイデンティティ構築への投資でもありとも考えられている。このように言語学習は、個人的動機づけに支えられた心理学的言語習得の過程ととらえるより、複次的アイデンティティと文化資本獲得のために複雑な権力関係の中で行われる投資とする見方が近年脚光を浴びてきた。

しかし、言語学習はすべて文化資本獲得のための投資として行われるのだろうか。特に教育機関外で行われる外国語学習（日本での英会話学習や香港での生涯学習としての日本語学習など）においては、他の要因が大きな役割を占めるのではないか。筆者が日本で

った日本人成人の英会話学習についての質的研究では、多くの学習者が特に明確な目的で学習しているわけではなく、他の学習者や教師（ネイティブスピーカー）とのカジュアルな談話を通して、喜び、楽しみ、満足感を味わいながら趣味的感覚で参加していることが分かった（Kubota, 2011a）。つまり学習はいわば娯楽または「余暇活動」であり、投資と言うより快樂の「消費」という概念の方が当てはまるのである。

余暇学（leisure studies）の分野では、余暇活動がシリアスなものと同様にカジュアルなものに分類されている（Stebbins, 2007）。シリアスな余暇はたとえばアマチュア写真家やアマチュア歴史家などに見られるように、専門的知識や技能の追求が特徴である一方、カジュアルな余暇は外食、映画鑑賞、歓談、旅行など、歓楽を求める活動である。上記の英会話学習者の意識と行動はカジュアルな余暇活動を象徴しているように思われる。人々は歓乐的余暇活動のために消費をつぎ込む。消費されるのは様々なサービスであるが、同時に、英会話学習者は、日常世界を離れた想像の世界で同士とともに過ごす楽しさ、喜び、満足感も消費していると考えられる。カジュアルな余暇活動としての外国語学習の目的は多くの場合、言語能力の向上というより、現実と想像上の社交場面への「参加」であり、それによってもたらされる満足感が消費されていると考えることができるのではないだろうか。

余暇活動は社会的に無害のように見えるが、実は問題もはらむ（Rojek, 2005）。例えば英会話学習では、余暇の消費活動の背後に、白人崇拜のイデオロギーや人種、ジェンダー間の不平等な権力関係が絡み合っている。余暇活動のサービス提供者（英会話学校など）は消費者の願望を巧みに操りながらイデオロギーの助長に加担しているとも考えられる。余暇活動と消費としての外国語学習が、学習者個人と社会にどのような意義や影響を与えるのか、さらに研究を進める必要がある。

## 2. 香港の事例（瀬尾匡輝・山口悠希子）

### 2.1. 問題意識と背景

これまで香港の日本語教育でも「趣味」として日本語が学ばれている現状が指摘されてきたが（e.g. 木山ら, 2011）、学習者が日本語学習に何を見出し、どのように経験しているかという具体的な姿が十分明らかにされているとは言えない。特に香港では、初等・中等・高等教育機関以外で日本語を学ぶ学習者が全体の約70%を占め（国際交流基金, 2011）、その多くが夜や週末に生涯学習として学んでいる。ハッチンス（1968）は、生涯学習では余暇活動を通じた自己実現・人間的成長を重視する必要があると述べているが、果たして香港の生涯学習機関で学ぶ学習者らはどのように日本語学習を捉えているのだろうか。本節では、生涯学習として日本語を学ぶ学習者へのインタビューから、彼／彼女らにとっての日本語学習の意味を探り、香港における生涯学習としての日本語教育の在り方を考察する。

### 2.2. 方法

調査協力者は、香港で最も規模が大きい大学付属の社会人教育機関で日本語を学ぶ学習者（初級10名、中級6名）である。これまでの学習経験や学習動機、将来の目標を中

心に半構造化インタビューを行った。中級学習者で日本語でのインタビューを希望した者には日本語で行ったが、その他は主に英語で行い、データは日本語に訳して示した。

### 2.3. 結果と考察

調査協力者らは、香港に深く根付いている日本製品や日本のポップカルチャーなどへの漠然とした興味や日本文化好きの友人や家族の影響などから学習を始めていた。そして、「日本語が職場で使えると便利かもしれないけど、私の個人的な興味のほうが高いです。」（アミ、初級; 2011年7月24日）という発言が示すように、日本語を職業的に役立てることを第1の目的とはしていなかった。同様のことは中級や日系企業に勤める協力者からも窺え、調査協力者は社会経済的地位をある程度確立しており、必ずしも文化資本を獲得蓄積するために日本語学習に投資しているのではないと考えられる。

日本の会社は給料は安いんです。だから、仕事のために日本語を勉強したいのはそんな多くないです。...取引先は中国にたくさんいますから、北京語をよく話しています。英語はメールだけ書きます。同僚は広東語話しています。日本語は趣味。（張、中級; 2012年6月7日）

（仕事で日本語を使うことについて）もし機会があったらいい経験になると思うけど、でも私にとって特別とかはっきりした目的ではないです。（デージー、中級、日系企業勤務; 2012年6月17日）

だが、調査協力者は文化資本獲得に代わる明確な目的を持っていないわけではなさそうだ。リンは「1週間1回クラスメートと先生会いますのが良かった。クラスへ来てエンジョイ、そして帰る。...うちで勉強しない、全然しない。」（中級; 2012年6月22日）と述べ、その場限りの楽しみに満足しているように思われた。他の協力者も日本語の上達というより、そこで出会う人々との交流や学習という行為そのものに悦びを見出しており、日本語学習という時間的・場所的空間を享楽として消費している姿が浮き彫りになった。

毎週クラスの後で、みんなで食事に行きます。みんな仕事や年齢が違うけれども、日本語を勉強することで友達になりました。（ケリー、初級; 2011年7月23日）

私は別に（日本語が話せるようになることに）そんなに本気じゃないから。でも、授業で、宿題で勉強する。何か勉強したり、言葉を覚えたりするのはおもしろい。...私にとってただコースに合格することが目的ではなくて、いい成績で合格したい。ただ合格して、次のレベルのコースに入るだけじゃ、別におもしろくないでしょう？だから、時間があたら勉強をして、いい成績で合格したいと思うの。（アミ、初級; 2011年7月24日）

このように日本語学習を文化資本を得るための投資としていない協力者の中には、学習内容が難しくなるにつれ、意欲を失う者もいた。ダンにはコースを辞める理由について「私はレジャーとして日本語を勉強しているから。今の内容を倍の時間かけて勉強できればいいんだけど...。」（初級; 2011年9月4日）と話し、カリキュラムが余暇活動として学ぶ学習者にとって必ずしも妥当なものとなっていない可能性が示唆された。

### 2.4. まとめと今後の課題

本調査では、社会人教育機関で生涯学習として学ぶ調査協力者は、文化資本の増大を第一義の目的とした投資ではなく、人との出会いを楽しんだり学習することの悦びを味わうものとして日本語を学んでいることがわかった。それは人生における精神的充実を求める姿であり、余暇活動としての日本語学習の側面が強いと言えるだろう。一方、提供されて

いるカリキュラムと学習者が求めるものの乖離も見られた。生涯学習の役割が学習者の余暇活動を通じた自己実現と考えるのであれば（ハッチンス, 1968）、今後は Kubota (2011a) が指摘するカジュアルな余暇活動としての言語学習も考慮しつつ、香港における社会人への日本語教育の在り方を問うていかなければならないだろう。

### 3. ポーランドの事例（佐野香織）

#### 3.1. 問題意識と背景

ポーランドは、国立大学を中心に研究を目的とした文献学としての日本語学習が行われてきた経緯を持つ（菅生, 2006）。しかし、近年、その他の学習機関や個人的に日本語を学ぶ学習者が増加している（国際交流基金, 2011）。これらの学習者の学びを探るためにインタビュー調査を行った。

#### 3.2. 方法

大学付属生涯学習講座の日本語クラスを受講しているポーランド人成人学習者2名に半構造化インタビューを行った。インタビューは1対1で行い、すべて日本語で行った。

カイ（仮名）	20代女性	2012年4月18日	大学3年生（生涯学習講座主宰大学とは別大学）日本関係の専攻ではない。日本生まれ、5歳でポーランド帰国。
サシャ（仮名）	20代男性	2012年3月28日	会社勤務。高校生の時から自分で日本語学習を始める。日本渡航経験なし。

#### 3.3. 結果と考察

##### 3.3.1 「自分の中の日本」

日本語学習を始めたきっかけは、幼い頃から「日本」が実は身近に存在し無意識のうちに親しんできたこと、「日本」の「文化」がすでに自分の中にあることに成長してから気付き、自分の中にある「日本」を知りたいと思ったことであることが窺える。

それに、ま、子供のころはすでに色々なアニメを知っていましたが、そのときは（日本の）アニメだと分かっていませんでした。  
やっぱり、高校生くらいになると、ブームになる、なって、（日本のものだと分かりました）アニメや一、漫画、ゲームなど、原因だったけど、少し、自分でも日本語を少し学べたら、結構きれいなことばと気づきました。  
（サシャ; 2012年3月28日）

##### 3.3.2 「自分探し」

日本語学習継続要因は言語的知識の学びも同時に含んだ、多様な「好き」であり、学習者は仲間と空間・時間的に日本語の学びを共有しながら、「自分探し」を行っている。学習者は自分の中に同時に存在する多様な立場での「自分の居場所探し」の実践を仲間と行っていると見られる。

そして、すごく日本語が好きで、ただ日本語が大好きで、やめる必要がない。  
（サシャ 2012年3月28日）

もう、日本語を勉強を始めた、と、日本語は私、私に、私は日本語を勉強するのは私は楽しめるので、なんか終わる気がないん、だから 楽しいから、とても楽しいから、いろんな人を、日本語を勉強するのおかげで、あったのに、なんか、終わりたくない、（カイ; 2012年4月18日）

このような「居場所探し」実践はアイデンティティ形成のプロセスであると考えられる(Wenger, 1998)。上記のカイは、日本にはまたいつか行ってみたいと思っているが、大学の日本学科で学ぶ・研究するという希望や、日本に関連した仕事に就くためという学習目的はない。サシャはまだ見ぬ日本への思い、夢、憧れを抱いているが具体的な展望は持っていない。生涯学習講座では、主に文化資本獲得を目指した学習者向けの日本語教育を行っているが、この知識習得に対しても「好き」という姿勢を見せている。カイとサシャには、楽しみとして日本語学習を消費しているという側面と、教室における文化資本としての日本語学習という側面、少なくとも2側面以上の多層的な立場でのアイデンティティ形成のプロセスであることが分かる。言語的な能力向上だけではない学びを仲間と共有する、という学びを含む多層的な構造の中にいると考えられるだろう。

私には、日本語は、日本語のことばの中に、すばらしい思いかたがめざっていると思います。なんか、ポーランドの、えー、思い方と全然違うんですけど。たとえば何か特別、、とか、どうあって、あーどうやって人生す、すごせばいいとか。とっても、ぜんぜん違う、、、え、、、視点？、視点がめざってると思います。だから、日本語を勉強 えーと、している途中で、、、なんかー、えー 違う世界をえー、、うーん違う世界を創造できます。(カイ;2012年4月18日)

### 3.4. 今後の課題

上述のような「楽しみ」としての日本語活動に「参加」することを学習と考えると、この「楽しみ」は、自分が属する共同体とは別の「居場所」を見つけ仲間と結びつきつながら可能性を持っているといえる。それと同時に、日本の一側面的な部分の助長、ソフトパワーといった国家的経済イデオロギーを文化的イデオロギーに変換する、または対抗するものになる可能性もないとはいえない。日本語教育においても、これらの可能性があることを考慮にいれつつ、様々な地域でこうした学習者の多様な実践や立場からのことばの学び・教育のあり方を考えて行く必要があるといえる。

## 4. フランスの事例（鬼頭夕佳）

### 4.1. 問題意識と背景

CEFR や JF スタンドアードの浸透とともに、フランスの教室でも近年ますます運用力の育成が重視されている。こうしたコミュニケーションの道具としてのことばの学習は評価されるが、一方で学習者の目的は日本語でのコミュニケーションにあるのかそれとも別の「何か」なのか、ことばを学ぶとはコミュニケーションの道具が一つ増えることに過ぎないのかといった疑問も生まれる。このような問題意識のもと、学習者へのインタビュー調査をもとに日本語の選択理由や学習動機の変化について考察をおこない、筆者の現場での日本語教育の意義について考えたい。

### 4.2. 方法

フランスの理工系大学で第二、第三外国語として日本語を学ぶ学生を対象に日本語選択の理由、学習動機の変化などについて調査を行った。3年の当該コースを終了した学習者4名には個別の半構造化インタビューを、一年目を終了した学生4名にはグループでの半

構造化インタビューを実施した。いずれのインタビューも学習者の母語で行った。インタビューは文字化され、語りの中に繰り返される「ことば」を中心に分析された。

#### 4.3. 結果と考察

選択理由の語りでは、「機会」、「好奇心」、「発見」といったことばが繰り返され、「喜び」を重視する姿勢も見られる。

ちょっと変わった言語を学ぶよい機会だと思った。日本へ（研修に）行って、その国を見てみたかった<sup>2</sup>。（...）どうしてロシア語や中国語じゃないのか...。よくわからないけど、中高の地理の授業やメディアを通じて聞く日本の話題などから。要するに好奇心で始めた。それに、ちょっとオリジナルだし。（マルク; 2010年3月13日）

日本語学習が何かの役にたつのかということは考えなかった。あえて言えば、視野を広げることが目的だ。結果として、仕事の上で役に立つことがあるなら、それはそれでよいことだけど、それが目的ではない。それより喜びとか知的好奇心のため。もし仕事のためならドイツ語を選択していたが、授業は日本語ほど楽しくなかったと思う。（イヴォンヌ; 2012年6月5日）

また「興味」ということばからは学習態度の変化が見出せる。

ぼくは日本文化には興味があったけど、日本語に興味があったわけじゃない。でも今は日本語にも興味が出てきた。以前は考えなかったけど、今はたとえば日本への研修や留学などを考えるようになった。（アクセル; 2012年6月5日）

さらに、学習に対しては「刺激的」ということばも繰り返された。

つまり好奇心で始めた。始めてからは、日本語学習はいい意味で驚きがあり、刺激的だったので、やる気が出てきた。（ラファエル; 2012年6月5日）

この分析で浮かび上がるのは、新しい言語学習を未知の文化を発見する格好の機会として捉え、将来への投資というより現在の好奇心や喜びのために学習する学生たちの姿だ。その言語が日本語なのは漠然とした興味からであり、言語や国について特別な予備知識があったわけではない。しかし、学習過程での知的好奇心の刺激や喜びが学習意欲を高め、さらには当初視野になかった専門と日本語との結びつきが生まれる例も見られた。これはある意味、学習を通じた自己発見と見ることもできよう。

#### 4.4. 今後の課題

大学での学習を「余暇活動」（Kubota, 2011a）とみなすことは難しいものの、今回の調査において、学習者は「投資」よりもむしろ自己満足や自己更新を日本語学習に求め、見いだしており、「余暇活動」と共通の情緒的な側面が観察された。福島（2011）は、CEFRが「コミュニケーション能力」と並び言語使用者の能力とする「叙事的知識」「技能とノウ・ハウ」「実存的能力」などの「一般的能力」の扱いの不十分さを指摘しているが、ことばをアイデンティティの問題とするならば、実用重視の教室で見過ごされがちな個人の価値観や情動により目を向けることが必要だろう。また、教室を、将来の準備ではなく「今ここ」にあるコミュニティにおいて人間関係を築きながら自己アイデンティティを形成する場として捉え直すことも、各々の教室における日本語教育の意義を再検討する上で重要な視点の一つとなるだろう。

## 5. カナダの事例（米本和弘）

### 5.1. 問題意識と背景

カナダでも、近年、日本語学習者の学習動機の多様化が報告されている（国際交流基金, 2011）が、高等教育機関における日本語教育が地域・文化研究の一環として位置づけられていること（谷口, 2011）や、学習者の減少が深刻な問題として報告されていること（CAJLE, 2012）を考えると、学習者の学習動機・目的が十分に理解され、考慮されているのか疑問が残る。そこで、本節ではインタビュー調査から、カナダの学習者の学習動機・目的を探り、日本語学習がどのように捉えられているのか検討することを目的とする。

### 5.2. 方法

本調査の調査協力者は、フランス語圏の英語系の大学で初級後半の日本語コースを履修している大学生4名である。本調査では学習経験や学習動機・目的、将来像などに焦点を当てた半構造化インタビューを行った。なお、全て一対一で英語と日本語で行った。

### 5.3. 結果と考察

データ分析の結果、調査協力者は、日本の映画やゲーム、さらに日本での生活経験など、身近にあった「日本」をきっかけに日本語学習を始めていた。そして、「あんまり日本語、勉強したいと思って、日本語勉強始めたことはないです」（Jiho; 2012年4月26日）という学習は、学習する過程で、様々な経験や自分の置かれた環境に影響を受け、変化を続けていることが示唆された。特に、インタビューではJustinが「Everyone studies with a purpose, everyone wants to study」（2012年4月21日）と指摘しているように、調査協力者に共通して、現在の学習への意識、そして習得への意思が高い様子が窺われた。

この変容に影響を与えた要因としては、大学生という年齢から、自身の将来を具体的に描き、その中で学習を捉え始めたという点が挙げられる。Nilsは外交官になりたいと述べ、また、「それ[英語とフランス語]だけじゃ足りないと思った」（2012年4月25日）という発言からも文化資本という見返りを求め、学習に投資（Norton, 2000）している様子が見られた。他の協力者は、同様に「But right now, I don't wanna work in Japan right now. But if I had to work somewhere, it would be Japan」（Justin; 2012年4月21日）、「たぶん日本で住んでみたい」（Gisèle; 2012年4月25日）、「将来いつか便利じゃないかと思って、そしてビジネスをいつかしたら...。...ただ楽しいから、今はやっています」（Jiho; 2012年4月26日）と述べてはいるものの、比較的弱い口調からもわかるように、インタビュー全体を通して、積極的に文化資本の獲得・蓄積を期待しているようではなかった。

投資に代わり、強く浮かび上がって来たのは、調査協力者のアイデンティティ形成と深く結びついた学習であった。そこには、大学生という年齢とともに、学習が主体的、自律的な活動として行われ始めたことに要因があると考えられる。その中で、日本語や日本語学習には単なる言語や意思伝達手段獲得とは異なった役割が期待されていることが窺われた。Justinは日本語学習の目的を「My purpose is to find a purpose」（2012年4月21日）と述べ、言語活動そのものを目的としているのではなく、言語活動を通じ、自己を探求し、自己実現を図る過程として日本語学習を捉えているように感じられた。

あの... I really think I like Japan, でも I'm not sure. ...I really want to know what it is, I liked about Japan. The language helps me in a way to see which aspect of Japan I like.

Jiho も日本語への愛着に言及しながらも、日本語を選択した理由に失われた自信の回復を挙げ、学習には、自己肯定感の形成という、習得以外の意味があることを示唆していた。

物理学で勉強してもよくわからない。でも、日本語勉強したら、あ、これは本当にわかる。はっきりわかる。そういう気持ちもあって…。頭を冷やす、なんか自信をつける、その何かが必要だったんです。(2012年4月26日)

本調査では、学習者のコースでの単位が大学での成績に換算されるような場であっても、知識や文化資本の獲得・蓄積といった目的から行われるのではない、個人のアイデンティティと密接に関わった日本語学習を確認することができた。

#### 5.4. 今後の課題

言語は話者や社会、文化と切り離し考えられるものではない。しかし、本調査の結果を見る限り、日本語教育が単に地域研究や文化研究の一環として位置づけられ、日本語教育のあり方が明確に提示できていない場合、その日本語教育は果たして学習者の学習動機や目的に対応できているのか疑問が残る。今後は、日本語教育学の専門性(細川, 2004)や、高等教育における言語教育の担う役割、意義(Kubota, 2006)という視点から、カナダにおける日本語教育を再検討していく必要があると考えられる。また、一口にカナダと言っても、広い国土に様々な学習者が存在しており、それぞれの地域で異なった傾向が見られることが予想される。このことから、さらなる調査が必要不可欠であると言える。

#### 6. まとめ(久保田電子)

前述したように、Kubota (2011a) は日本の英会話学習者の意識や行動の観察に基づき、外国語としての英語学習を、言語能力をテコとして文化資本の獲得するための「投資」というより、社交や趣味の「余暇活動」を通しての喜びや楽しさの「消費」としてとらえた。つまり、学習の目的は言語力向上というより、現実及び想像上の社交の場への参加である。これは、外国語学習があこがれや願望を通して、想像上の主体形成の役割を担うという点(Kramersch, 2009)にもつながっている。

本パネルでは、世界各国の大学または生涯学習のための教育機関で学ぶ日本語学習者の多様な意識が明らかになった。外国語学習の究極目的は言語習得であることが自明の命題のように理解されがちであるが、実際には、言語習得だけでなく、アイデンティティ構築や余暇活動に付随する喜びなども含めた情緒的な側面が大きな割合を占める場合もあることが明らかになった。学習者個人のアイデンティティ構築や情緒面の変化に焦点が置かれたこのような研究では、着眼点が「知」から「情」にシフトしていると言える。

香港の事例では、学習への満足感やクラスメートとの交流という余暇活動の側面が観察された。同様にポーランドの事例でも、学びの場を共有しながら日本語好きの自分探しをする姿が浮かび上がった。一方、カナダとフランスの大学での日本語学習では、学習は余暇活動とはとらえられない。しかし、余暇活動としての言語学習で重要と思われる社会的・情緒的要因、例えば楽しみ、達成感、同人との関わりなどは大学教育の場でも見られた。情緒面のキーワードとしては、興味(「好き」)、好奇心、自信回復、自己満足、自分探し(自己の中の日本的アイデンティティの模索)などがあげられる。その他にも、言語学習が逃避の手段に使われることもあり得る(例:いじめや個人的苦境から逃れるため



に語学留学する) (Kubota, 2011b)。このように「情」に根ざした学習はアイデンティティと深く関わり、文化資本獲得のための投資というより、自己実現のための探求と考えることができよう。

これらの考察は、教育実践にどのような示唆を与えるだろうか。文化資本獲得のための言語習得を目的としたカリキュラム、教材、指導アプローチは、これらの学習者にはそぐわないのではないかと思われる。学習者の言語、文化、言語学習に対する思い入れがどのようにアイデンティティや学習に対する姿勢にかかわっているのかを教師が意識することが、学習者の願望を満たす手助けになるのかもしれない。また近年、外国語教育は新自由主義的教育観のもとで、測定可能な実践的能力が重視されたり、グローバル競争に打ち勝つための言語教育政策が展開されたりしているが (Kubota, 2011c; Park, 2011)、人的資本 (human capital) の増大だけが言語学習の目的ではないことも教育者として認識する必要がある。

今後の研究課題として何点かあげられる。まず、日本の英会話学習は余暇活動と消費という意味合いが強いが、外国語としての日本語学習や他の外国語学習はどのようなのだろうか。グローバルあるいはローカル社会における言語間または民族・人種・文化間の権力関係によって学習者の意識は異なってくるのかもしれない。英語が商品化され消費されるのは、英語の持つ象徴的権力と密接に関連しているが、日本語学習者の意識と歴史的に構築されて来た日本語の権力はどのような関係を持つのであろうか。個人の「情」の側面をさらに掘り起こし、それが一般社会のイデオロギーとどのようにかかわっているのかを探求する必要もある。

#### 【注】

1. 現お茶の水女子大学所属。
2. 原語では *découvrir* (発見する) という語が使われているが、ここでは「見てみる」と訳した。全ての日本語訳は筆者による。

#### 【参考文献】

- Bourdieu, P., & Passeron, J. (1990). *Reproduction in education, society, and culture*. Newbury Park, CA: Sage.
- Dörnyei, Z. (2001). *Teaching and researching motivation*. Harlow, UK: Longman/Pearson Education.
- Kramsch, C. (2009). *The Multilingual Subject. What language learners say about their experience and why it matters*. Oxford: Oxford University Press.
- Kubota, R. (2006). Teaching second languages for national security purposes: A case of post 9/11 U.S. In J. Edge (Ed.), *(Re-)Locating TESOL in an Age of Empire* (pp. 119-138). Basingstoke, UK: Palgrave Macmillan.

- Kubota, R. (2011a). Learning a foreign language as leisure and consumption: Enjoyment, desire, and the business of *eikaiwa*. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 14, 473-488.
- Kubota, R. (2011b). “Seeking refuge: Language learning as a means to escape” Paper presented at Conference of American Association for Applied Linguistics, Chicago, IL (March).
- Kubota, R. (2011c). Questioning linguistic instrumentalism: English, neoliberalism, and language tests in Japan. *Linguistics and Education*, 22, 248-260.
- Norton, B. (2000). *Identity and language learning: Gender, ethnicity and educational change*. Harlow, UK: Longman/Pearson Education.
- Park, J.S.-Y. (2011). The promise of English: Linguistic capital and the neoliberal worker in the South Korean job market. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 14, 443-455.
- Rojek, C. (2005). *Leisure theory: Principles and practice*. Basingstoke, UK: Palgrave Macmillan.
- Stebbins, R. A. (2007). *Serious leisure: A perspective of our time*. Transaction Publishers: New Brunswick, NJ.
- Wenger, E. (1998). *Communities of Practice: Learning, Meaning, and Identity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- カナダ日本語教育振興会 <[www.cajle.info](http://www.cajle.info)> (2012年10月1日)
- 木山登茂子・中野貴子・周宏陽・上田早苗・望月貴子・蘇凱達・青山玲二郎 (2011). 「2010年香港日本語学習者背景調査報告」『日本学刊』14, 176-195.
- 国際交流基金 (2011) 『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査・2009年 概要』 <<http://www.jpfi.go.jp/japanese/survey/result/index.html>> (2012年10月3日)
- 菅生早千江 (2006) 「ポーランドにおける日本語教育事情：ポーランド日本語教師会・組織づくりの実践を中心として」『言語文化と日本語教育』32, 39-48
- 谷口龍子 (2011) 「カナダにおける日本語教育（事前の聞き取り調査並びに出張報告）」 <<http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/doc/11033103.pdf>> (2012年10月1日)
- 福島青史 (2011) 「『共に生きる』社会のための言語教育—欧州評議会の活動を例として」『リテラシーズ』8, 1-9.
- 細川英雄 (2004) 「日本学を超えて—日本語教育学の位置づけと課題—」『早稲田大学日本語教育研究』4, 27-35.
- ロバート・M・ハッチンス (1968) 新井邦男 (1979) 訳『ラーニング・ソサイエティ』至文堂